

有島武郎全集

第四卷

大正十三年六月廿五日印刷
大正十三年七月五日發行

(非賣品)

著者 有島武郎

發行人 足助素一

第四卷
印刷人 島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地
三秀舍

發行所

叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
電話 牛込 二五七三番
振替口座東京 四二八八九番

有島武郎全集 第四卷

目次

或る女 一

附録(第二)

書後 三

序及跋 三一

廣告文 五九

附録（第二）

斬魔劍	三
たとへばなし	一九
秋風	二五
北歐文學が與ふる教訓	三一

口 畫

著者筆蹟（一九二二年筆）	（卷頭）
--------------	------

或る女

一

新橋を渡る時、發車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空氣に包まれて聞こえて來た。葉子は平氣でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駆けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする驛夫と争ひながら、八分がた閉まりかゝつた戸の所に突つ立つてこつちを見成つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて済みませんでした事……まだ間に合いますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麥稈帽子を一寸脱いで、黙つたまゝ青い切符を渡した。

「おや何故一等になさになかつたの。さうしないといけない譯があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに驛夫がせき立てるので、葉子は黙つたまゝ青年とならんで小刻みな

足どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延ばして待つてゐた。二人がてん／＼に切符を出さうとする時、

「若奥様、これをお忘れになりました」

と云ひながら、羽被^{はつび}の紺の香ひの高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまゝ慌てたやうに追つ駈けて來て、オリヅ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く／＼、早くしないと出つちまいますよ」改札が堪らなくなつて癩癩聲をふり立てた。

青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札ががみ／＼怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神経はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ氣味であつた歩みをびつたり止めてしまつて、落ち付いた顔付で、車夫の方に向きなほつた。

「さう御苦勞よ。家に歸つたらね、今日は歸りが遅くなるかも知れませんが、お嬢さんたちだけで校友會にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから横濱の近江屋——西洋小間物屋の近江屋が來たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

車夫はきよ／＼と改札と葉子とを片身がはりに見やりながら、自分が汽車にでも乗りおくれるやうに慌ててゐた。改札の顔は段々險しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子はする／＼とその方に近よつて、

「どうも済みませんでした事」

といつて切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顔付をしながら、それでもおめくくと切符に孔を入れた。

プラットホームでは、驛員も見送人も、立つてゐる限りの人々は二人の方に眼を向けてゐた。それを全く氣付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を並べて、しづくと歩きながら、車夫の届けた包物の中にかつて、音楽者のやうにデリケートなその指先で、わざとらしく幾度か青年の手に觸れる機會を求めた。列車の中から有る限りの顔が二人を見迎へ見送るので、青年が物慣れない處女のやうに羞かんで、而かも自分から自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一等近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポケットに突つ込んで、靴の爪さきで待遠しさうに敷石を敲いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年（青年は名を古藤といつた）が葉子に續いて飛び乗つた時には、機關車の應笛が前方で朝の町の賑やかなざめきを破つて響き渡つた。

葉子は四角なガラスを箝めた入口の繰戸を古藤が勢よく開けるのを待つて、中に這入らうとして、八分通りつまつた兩側の乗客に稻妻のやうに鋭く眼を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入つた、瘦せた中年の男に視線

がとまると、はつと立ちすくむ程驚いた。然しその驚きは瞬く暇もない中に、顔からも脚からも消え失せて、葉子は惡びれもせず、取りすましもせず、自信ある女優が喜劇の舞臺にでも現はれるやうに、軽い微笑を右の頬だけに浮べながら、古藤に續いて入口に近い右側の空席に腰を下ろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指を何んとも云へない好い形に折り曲げた左手で、鬢の後れ毛をかき撫でる序でに、地味に装つて來た黒のリボンに觸つて見た。青年の前に座を取つてゐた四十三四の脂ぎつた商人體の男は、あ、た、ふ、たと立ち上つて自分の後ろのシェードを下ろして、折ふし横ざしに葉子に照りつける朝の光線を遮つた。

紺の飛白に書生下駄をつツかけた青年に對して、素性が知れぬほど顔にも姿にも複雑な表情を湛へたこの女性の對照は、幼い少女の注意をすら牽かずにはおかなかつた。乗客一同の視線は綾をなして二人の上に亂れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な對照になつてゐるといふ感じを快く迎へてでもゐるやうに、青年に對して殊更ら親しげな態度を見せた。

品川を過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見据ゑる眼を眉のあたりに感じて徐ろにその方を見かへつた。それは葉子が思つた通り、新聞に見入つてゐるかの瘦せた男だつた。男の名は木部孤筈と云つた。葉子が車内に足を踏み入れた時、誰れよりも先きに葉子に眼をつけたのはこの男であつたが、誰れよりも先きに眼を外らしたのもこの男で、すぐ新聞を目八分にさし上げて、それに讀み入つて素知らぬふりをしたのに葉子は氣がついてゐた。而して葉子に對する乗客の好奇心が衰へ始めた頃になつて、彼れは本氣に葉子を

見詰め始めたのだ。葉子は豫めこの刹那に對する態度を決めてゐたから慌ても騒ぎもしなかつた。眼を鈴のやうに大きく張つて、親しい媚びの色を浮べながら、黙つたまゝで軽く點頭かうと、少し眉と顔とをそつちにひねつて、心持ち上向き加減になつた時、稻妻のやうに彼女の心に響いたのは、男がその好意に應じて微笑みかはす様子のないと云ふ事だつた。實際男の一字眉は深くひそんで、その兩眼は一と際鋭さを増して見えた。それを見て取ると葉子の心の中はかつとなつたが、笑みかまけた眸はそのまゝで、するくると男の顔を通り越して、左側の古藤の血氣のいゝ頬のあたりに落ちた。古藤は繰戸のガラス越しに、切割りの帷を眺めてつくねんとしてゐた。

「又何か考へていらつしやるのね」

葉子は瘦せた木部にこれ見よがしと云ふ物腰で華やかに云つた。

古藤はあまりはづんだ葉子の聲にひかされて、まんじりとその顔を見守つた。その青年の單純な明らさまな心に、自分の笑顔の奥の苦がい澁い色が見抜かれはしないかと、葉子は思はずたじろいだ程だつた。

「何んにも考へてゐやしないが、蔭になつた帷の色が、餘りに綺麗だもんで……紫に見えるでせう。もう秋がゝつて來たんですよ」

青年は何も思つてゐはしなかつたのだ。

「本當にね」

葉子は單純に應じて、もう一度ちらつと木部を見た。瘦せた木部の眼は前と同じに鋭く輝いてゐた。葉子は正

面に向き直ると共に、その男の眸の下で、悒鬱な險しい色を引きしめた口のあたりに漲らした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべき筈である。

二

葉子は木部が魂を打ちこんだ初戀の的だつた。それは丁度日清戦争が終局を告げて、國民一般は誰れ彼れの差別なく、この戦争に關係のあつた事柄や人物やに事實以上の好奇心をそゝられてゐた頃であつたが、木部は二十五といふ若い齡で、ある大新聞社の従軍記者になつて支那に渡り、月並みな通信文の多い中に、際立つて觀察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を發表して、天才記者といふ名を博して目出度く凱旋したのであつた。その頃女流基督教徒の先覺者として、基督教婦人同盟の副會長をしてゐた葉子の母は、木部の屬してゐた新聞社の社長と親しい交際のあつた關係から、ある日その社の従軍記者を自宅に招いて慰勞の會食を催した。その席で、小柄で白皙で、詩吟の聲の悲壯な、感情の熱烈なこの少壯従軍記者は始めて葉子を見たのだつた。

葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に戀をし向けられて、その圍みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を樂ませて行くタクトは十分に持つてゐた。十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女學生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸はして首席を占めたんだと、嚴格で通つてゐる米國人の老校長に、思ひもよらぬ浮名を負はせたのも彼女である。上野の音樂學校に這入つてヴァイオリ

ンの稽古を始めてから二箇月程の間にめき／＼上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケーベル博士一人は濫い顔をした。而して或る日「お前の樂器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無愛想に云つて退けた。それを聞くと「さうで御座いますか」と無造作に云ひながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまゝ學校を退學してしまつたのも彼女である。基督教婦人同盟の事業に奔走し、社會では男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して振舞つたその母の最も深い隠れた弱點を、拇指と食指との間にちやんと押へて、一步もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の眼には總ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潜り込ませて置いて、もう一步といふ所で突つ放した。戀の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、或る機會を絶頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺のやうに知つてゐた葉子は、どの男に對しても自分との關係の絶頂が何處にあるかを見ぬいてゐて、そこに來かゝると情け容赦もなくその男を振り捨ててしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分達の獸性を恥ぢるやうに見えた。而して彼等は等しく葉子を見誤つてゐた事を悔いるやうに見えた。何故といふと彼等は一人として葉子に對して怨恨を抱いたり、憤怒を漏らしたりするものはなかつたから。而して少しひがんだ者達は自分の愚を認めるよりも葉子を年不相應にませた女と見る方が勝手だつたから。それは戀によろしい若葉の六月の或る夕方だつた。日本橋の釘店くぎざなにある葉子の家には七八人の若い従軍記者がまだ戦塵の抜けきらないやうな風をして集まつて來た。十九でゐながら十七にも十六にも見れば見られるやうな

華奢な可憐な姿をした葉子が、愼みの中にも才走つた面影を見せて、二人の妹と共に給仕に立つた。而して強ひられるまゝに、ケーベル博士から罵られたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全靈はたゞ一と目でこの美しい才氣の漲り溢れた葉子の容姿に吸ひ込まれてしまつた。葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。而して運命は不思議な惡戯をするものだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌——骨細な、顔の造作の整つた、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、よく見ると他の部分の纖麗な割合に下顎骨の發達した——まで何處か葉子のそれに似てゐたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したやうに思つて、一種の好奇心を挑發せられずにはゐなかつた。木部は燃え易い心に葉子を焼くやうにかき抱いて、葉子は又才走つた頭に木部の面影を軽く宿して、その一夜の饗宴はさりげなく終りを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といつてもよかつた。苟も文學を解するものは木部を知らないものはなかつた。人々は木部が成熟した思想を提げて世の中に出て來る時の華々しさを噂し合つた。殊に日清戰役といふ、その當時の日本にしては絶大な背景を背負つてゐるので、この年少記者は或る人々からは英雄ヒーローの一人とさへして崇拜された。この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。その感傷的な、同時に何處か大望に燃え立つたやうなこの青年の活氣は、家中の人々の心を捕へないでは置かなつた。殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に有爲多望な青年だと讃めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせゝら笑つた。而して心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る

見る抑へがたく募り出したのは勿論の事である。

かの六月の夜が過ぎてから程もなく木部と葉子とは戀といふ言葉で見られねばならぬやうな間柄になつてゐた。かう云ふ場合葉子がどれ程戀の場面を技巧化し藝術化するに巧みであつたかは云ふに及ばない。木部は寝ても起きて夢の中にあるやうに見えた。二十五といふその頃まで、熱心な信者で、清教徒風の誇りを唯一の立場としてゐた木部がこの初戀に於てどれ程眞剣になつてゐたかは想像する事が出来る。葉子は思ひもかけず木部の火のやうな情熱に焼かれようとする自分を見出だす事が屢々だつた。

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して豫てから或る事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと云ふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落ち付き拂つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺戟されてたくらみ出すと見える殘虐な諷計は、わだくみ年若い二人の急所をそろ／＼と窺ひよつて、腸も通れと突き刺してくる。

それを拂ひかねて木部が命限りに濺ぐのを見ると、葉子の心に純粹な同情と、男に對する無條件な捨て身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自身の穿に多愛もなく酔ひ始めた。葉子はこんな眼もくらむやうな時れ／＼しいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。葉子の母が暴力では及ばないのを悟つて、すかしつなだめつ、良人までを道具につかつたり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの智力を搾つた懷柔策も、何んの甲斐

もなく、冷靜な思慮深い作戰計畫を根氣よく續ければ續ける程、葉子は木部を後ろにかばひながら、健氣にも弱い女の手一つで戰つた。而して木部の全身全靈を爪の先き想ひの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我を折つた。而して五箇月の恐ろしい試練の後に、兩親の立會はない小さな結婚の式が、秋の或る午後木部の下宿の一間で執り行はれた。而して母に對する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなつた。

木部はすぐ葉山に小さな隠れ家の様な家を見付け出して、二人は睦まじくそこに移り住む事になつた。葉子の戀は然しながらそろ／＼と冷え始めるのに二週間以上を要しなかつた。彼女は競争すべからぬ關係の競争者に對して見事に勝利を得てしまつた。日清戰爭といふものの光も太陽が西に沈む度毎に減じて行つた。それ等はそれとして一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男といふものの裏を返して見た事だつた。葉子を確實に占領したといふ意識に裏書きされた木部は、今までおく／＼にも葉子に見せなかつた女々しい弱點を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。筆一本握る事もせず朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的な癖に恐ろしく我儘で、今日々々の生活にさへ事缺きながら、萬事を葉子の肩になげかけてそれが當然な事でもあるやうな鈍感なお坊ちやん染みた生活のしかたが葉子の鋭い神經をいら／＼させ出した。始めの中は葉子もそれを木部の詩人らしい無邪氣さからだと思つて見た。而してせつせ／＼と世話女房らしく切り廻す事に興味をつないで見た。然し心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛捧

がいつまでも續かうぞ。結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係はらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼れであつたのに、思ひもかけぬ貪婪な陋劣な情慾の持主で、而かもその慾求を貧弱な體質で表はさうとするのに出喰はすと、葉子は今まで自分でも氣が附かずにゐた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感じずにはゐられなかつた。夕食を済ますと葉子はいつでも不満と失望とでいら／＼しながら夜を迎へねばならなかつた。木部の葉子に對する愛着が募れば募る程、葉子は一生が暗くなりまさるやうに思つた。かうして死ぬために生れて來たのではない筈だ。さう葉子はくさ／＼しながら思ひ始めた。その心持が又木部に響いた。木部は段々監視の眼を以て葉子の一舉一動を注意するやうになつて來た。同棲してから半箇月もた／＼ない中に、木部はや／＼もすると高壓的に葉子の自由を束縛するやうな態度を取るやうになつた。木部の愛情は骨に沁みる程知り抜きながら、鈍つてゐた葉子の批判力は又磨きをかけられた。その鋭くなつた批判力で見ると、自分と似寄つた姿なり性格なりを木部に見出だすといふ事は、自然が巧妙な皮肉をやつてゐるやうなものだつた。自分もあんな事を想ひ、あんな事を云ふのかと思ふと、葉子の自尊心は思ふ存分に傷けられた。

外の原因もある。然しこれだけで十分だつた。二人が一緒になつてから二箇月目に、葉子は突然失踪して、父の親友で、所謂物事のよく解る高山といふ醫者の病室に閉ぢ籠もらしてもらつて、三日ばかりは食ふ物も食はずに、淺ましくも男の爲めに眼のくらんだ自分の不覺を泣き悔んだ。木部が狂氣のやうになつて、やうやく葉子の隠れ場所を見つけて會ひに來た時は、葉子は冷靜な態度でしら／＼しく面會した。而して「あなたの將來のお爲めに

屹度なりませんか」と何気なげに云つて退けた。木部がその言葉に骨を刺すやうな諷刺を見出だしかねてゐるのを見ると、葉子は白く揃つた美しい齒を見せて聲を出して笑つた。

葉子と木部との間柄はこんな多愛もない場面を區切りにしてはかなくも破れてしまつた。木部はあらんかぎりの手段を用ゐて、なだめたり、すかしたり、強迫までして見たが、總ては全く無益だつた。一旦木部から離れた葉子の心は、何者も觸れた事のない處女のそのやうにさへ見えた。

それから普通の期間を過ぎて葉子は木部の子を分娩したが、固よりその事を木部に知らせなかつたばかりでなく、母にさへ或る他の男によつて生んだ子だと告白した。實際葉子はその後、母にその告白を信じさす程の生活を敢へてしてゐたのだつた。然し母は眼敏くもその赤坊に木部の面影を探り出して、基督信徒にあるまじき惡意をこの憐れな赤坊に加へようとした。赤坊は女中部屋に運ばれたまゝ祖母の膝には一度も乗らなかつた。意地の弱い葉子の父だけは孫の可愛さからそつと赤坊を葉子の乳母の家に引き取るやうにしてやつた。而してそのみじめな赤坊は乳母の手一つに育てられて定子といふ六歳の童女になつた。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。木部は葉子と別れてから、狂瀾のやうな生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立つても見たり、純文學に指を染めても見たり、旅僧のやうな放浪生活も送つたり、妻を持ち子を成し、酒に耽り、雑誌の發行を企てた。而してその總てに一々不滿を感じるばかりだつた。而して葉子が久し振りで汽車の中で出遇つた今は、妻子を里に返してしまつて、或る由緒ある堂上華族の寄食者となつて、これと云つ